富山大学 教育学部
附属教育実践研究指導センターニュース

第 14 号

CENTER NEWS

CENTER FOR RESEARCH AND TRAINING IN TEACHER EDUCATION

FACULTY OF EDUCATION, TOYAMA UNIVERSITY

富山大学教育学部附属教育実践研究指導センター ホームページ

目　　次

1．教育分野開発援助大学間協議会について……センター長　山極　隆……2
2．教育実習の改革について……教育実習検討委員会委員　山下　三郎……3
3．教育実習における「不易と流行」……附属小学校　田畑　章……6
4．新構想の教育実習を行って……堀川小学校　滝澤　久美……7
【研究会・公開講座】等紹介
5．国際電子ネットワーキング教育学会富山大会……教育情報科学　山西　潤一……9
6．富山大学リカレント学習コース……教育情報科学　山西　潤一……10
7．日本教育工学会「冬の合宿」研究会……教育情報科学　山西　潤一……11

1996年 3 月

富山大学教育学部附属教育実践研究指導センター

教育分野開発援助大学間等協議会について

センター長　山　極　　隆

我が国の開発途上国援助のうち，学術，教育，文化等については，留学生交流，日本語教育，青少年・婦人教育，開発援助人材養成，調査研究等の教育分野，主として農学，工学，医学等の分野で見られる開発途上国への学術協力，芸術文化，文化財保護等に代表される文化協力，開発途上国へのスポーツ協力，ユネスコ活動や国連大学など国際機関への協力などがある。近年，特に開発途上国から人造りへの協力要請の分野が増大している。

そのうち，教育分野においては，

(1) 従来，教育分野の協力が，援助国や国際機関において，開発途上国の社会経済開発に資するための人的基盤整備の手段と考えられていたが，近年は，教育について，一人一人の個人を尊重する「人間の開発（Human Development）という視点が重視されるようになってきた。

(2) これまでの我が国の教育分野での協力実績は，理・工系分野を中心にした高等教育や専門技術教育等が比較的多かったが，近年は，各開発途上国とも，自国の人造りに力を入れ，教育の重要性を認識し始めたことから，初等中等教育やあらゆる年齢層を対象とした識字教育などの基礎教育，教員養成などの分野についての協力が一層重要視されるようになってきたことなどが挙げられる。すなわち，開発における最も基礎的な土台を作る基礎教育分野の重要性に鑑み，基礎教育の充実に資する援助が必要になってきたのである。

一方，我が国の援助体制は，従来，個別的な対応に終始するきらいがあったが，人材養成の豊富な経験と実績を有する我が国の大学等の有機的な連携・協力の下に，増大する開発途上国からの人造り等への協力要請に組織的かつ継続的に対処していくため，教育分野の開発援助大学間等協議会（主査　山極　隆　富山大学教授）が，平成７年10月に文部省学術国際局の下に設置された。

この開発援助大学間等協議会は，すでに工学分野，農学分野，医学分野は設置されていたが，教育分野においても，前述したように初等教育や識字教育等の基礎教育分野を中心として，途上国からの協力要請が増大しており，文部省としても途上国の期待に積極的に応えていく必要があり，また，この協議会の設置を契機に，文部省，国立大学，地方公共団体の連携が一層強化され，途上国における教育協力が進展されることを期待して設置されたものである。

従来，教育分野における協力の課題として，国立大学等において，教員が途上国へ長期派遣される場合，法令上は派遣職員として現職参加が認められているが，派遣枠の予算上の制約，派遣教員の後補充が行われた場合の帰国後の処遇，派遣経験についての業績としての評価，大学としての事務的負担の増大等から，長期に派遣する若くて優秀な人材の確保が難しく，教育協力は，少数の教員の熱意で限定的に実施されてきたのが実態である。

今後は，国立大学等において，教育協力に対する全体の意識を高めるとともに，財政当局においては，必要な行財政的な措置を講じる等の環境整備が，一層図られる必要がある。

また，初等教育分野においては，学校の教員や教育センターを所管する地方教育委員会との連携が必須であり，関係機関における途上国援助のためのネットワークづくりを推進していくことが求められる。専門家派遣が継続的，組織的に行われるためのシステムづくりが緊急の課題である。

更には，教育分野における協力として，途上国の女性支援（Women in Development, WID）への配慮を欠かすことはできない。貧困，人口，エイズ，環境，開発と女性（WID）等の地球的規模の問題についても，教育は解決のための極めて有効な手段となるであろう。

教育実習の改革について

教育実習検討委員会委員　山　下　三　郎

本学部では，ここ数年来教務委員会や教育実習委員会で教育実習の見直しの必要性について論議されてきた。その間に，免許法の改訂等が行われたことも踏まえ，教育実習の実施時間や開設単位，教育内容などの見直しを行うために，平成６年10月に教務委員会と教育実習委員会の構成員で組織する教育実習検討委員会が設置された。

教育実習検討委員会では，

（１）４年一貫教育における教育実習の位置づけ

（２）教員採用試験で試される教師としての適性や模擬授業力への対応という観点から，教育実習検討委員会と教育実習委員会によって数回の検討が重ねられ，教育実習実施計画の試案作りが行われた。ここでできた試案に基づき，教務委員会で数回の協議が行われ，各教科・課程の意見を聴取しながら，教育実習の実施計画が立案された。この原案を基に，さらに度重なる教授会での審議によって実施計画案が了承され，平成７年度から実施された。

従来，本教育学部の教育実習は３年次と４年次に分けて実施されてきた。教育実習は附属学校・園に加え堀川小学校を教育実習校と定め，幼稚園実習の一部と副免実習は県下の協力校・園にお願いしてきた。

教育実習は９月から10月にかけて実施されたが，教育実習に先だって学生達には６月の附属学校・園などにおける観察参加と，実習直前の事前指導の受講を義務づけていた。今回の改革はこれらを基本的に見直すことにあったが，基本的に了解された考え方は以下の通りである。

（１）４年一貫教育の中で，２年次生から事前指導を含む観察参加を行わせる。

（２）主免許取得のための教育実習を３年次に完結する。副免許取得のための教育実習は従来通り４年次に行う。

（３）４年次に主免許にかかわる２単位分の選択単位を開設する。

などである。

（１）の問題は，早期から教職への関心と意欲を高め，教師としての職業適性を涵養する。

また，（２）については，４年次７月に実施される教員採用試験までに主免許にかかわる教育実習を終了し，教員採用試験で試される教師としての職業適性と，授業実践力を高める。

（３）については，教員採用試験受験者の一層の資質向上を図るなどをねらって方策が講じられた。また，後学期授業開始を考慮して，１単位あたり5.5～7.5日間とする範囲内で教育実習を行う。事前指導ではその内容の精選並びに新たに２年次の視察参加が検討されたうえ，実施に踏み切った。

小学校免許を主免とする教育実習は，附属小学校と堀川小学校を２単位宛交替して実施されることになった。それぞれの学校の前半実習を基本実習とし，後半は応用実習という形態で教育実習を行うことにした。中学校，養護学校，幼稚園を含むこれらの計画の詳細は表に示すとおりである。

この計画は今年度から実施されたが，今年度の計画は過度期のため前半の教育実習は４年次と３年次が重複し，実習校・園には大変ご迷惑をお掛けした。しかし，実施後の教育実習委員会や拡大教育実習検討委員会において，実習校の先生方からは，特に小学校の２学校交替の間隔を今回よりも長くする必要性が指摘されたほかは，それぞれさしたる問題もなく実施できたとのことであった。

教育実習後，３年次生に教員採用試験への受験予定や教育実習の実施状況等について自由記述によるアンケートを実施した。アンケートの回収率はほぼ100％であるが，その結果を整理すると以下のようになる。

1）教員採用受験予定者は情報教育課程を除くと半数を超える。
2）４年次における選択実習の履修希望者も，それぞれ半数を超える。

自由記述による調査結果を要点的に整理すると以下のようになる。

小学校では，前半と後半の交替にかかわる問題意識が極めて多く，公開授業に触れるものもかなり多かった。一部，過渡期である今年度のみにみられる意見もあった。

今回の教育実習でよいとする意見として，

それぞれの学校でしか学べないものが実習できた。

教育方法の異なる学校で実習ができたことに意義があった。

グローバルに学校教育を考えるようになった。

多くの子供と接することができた。

４年生と一緒に実習できて参考になった　などである。

問題だと思ったとする意見では，

前半と後半の間隔が短かった。

２校の実習は精神的に身体的にきつかった。

疲れを後半に持ち越した。

雰囲気や教育方針の違いにすぐには応対できなかった。

前半は４年生が主になり，どうしても３年生が従になった　などである。

小学校におけるその他の意見として，

前半・後半ともに公開授業を実施したほうがよい。

２校の実習を春と秋にずらせないか　などの意見があった。

中学校では，教育実習が長くなったことに対して，

今後の進路の方向づけができた。

生徒に十分溶け込めることができた。

後半は附属以外の中学校で実施できないか。

高校の教育実習も行いたい　などがあったが，他にも，

教えることの難しさと大切さがわかった。

学部における教職授業の大切さがわかった。

実習までの教職の授業が完結できないか　などがあった。

養護学校ではさしたる意見は見られなかったが，養護学校の実習期間をさらに長くしてほしいという意見があった。

幼稚園では，

小学校実習はきつかったが，幼児教育を見直すのにいい機会だった。

３年次の小学校実習はとてもよかったが，できれば２年次からできないか　などであった。

その他，全体にかかわるものとして，

２年次生からの教育実習が考えられないか。

前半は小学校で後半は中学校（副免）で実習するほうが実りが多いのでないか。

２週間という実習時間では短か過ぎる。

４年次生との実習はいろいろな問題があるにせよとてもよかった　などの意見があったが，観察・参加についてはさしたる意見が見られなかった。

教育実習検討委員会では，今年度の教育実習の実施状況を見ながら工夫や改善を加え，来年度の教育実習後，さらに多くの意見を頂いて必要ならば修正を行い，一層効果的な教育実習の改善ができればと考えている。

平成７年度教育実習実施計画（移行年度）

宮山大学教育学部

種別	内訳	単位	課程	履修者数			備考
				人			
小学校教育実習	3年次 必修(主免)	4	小学校	102	事前指導	附属小学校 13.5日 / 堀川小学校 11日	9月5日(火)~10月7日(土)
						堀川小学校 13.5日 / 附属小学校 11日	9月5日(火)~10月7日(土)
	3年次 必修(基礎免)	2	養護学校(第一類)	9		堀川小学校 13.5日	9月5日(火)~9月22日(金)
	4年次 必修(主免)	2	小学校	49		附属小学校 13.5日	9月5日(火)~9月22日(金)
				45		堀川小学校 13.5日	9月5日(火)~9月22日(金)
	3年次 選択(副免)	2	幼稚園	27		協力小学校 11日	9月25日(月)~10月7日(土)
	4年次 選択(副免)	2	中学校 幼稚園	36		協力小学校 11日	9月25日(月)~10月7日(土)
中学校教育実習	3年次 必修(主免)	3	中学校	47		附属中学校 21日	9月5日(火)~10月3日(火)
	3年次 必修(基礎免)	1	養護学校(第二類)	11		附属中学校 8日	9月5日(火)~9月14日(木)
	4年次 必修(主免)	2	中学校	51		附属中学校 13.5日	9月5日(火)~9月22日(金)
	4年次 選択	2	情報教育	6		附属中学校 13.5日	9月5日(火)~9月22日(金)
	4年次 選択(副免)	1	小学校	59		協力中学校 7.5日	9月26日(火)~10月4日(木)
	3年次 選択	2	情報教育	16		協力中学校 11日	9月25日(月)~10月7日(土)
教育実習 養護学校	3年次 必修(基礎免)	2	養護学校	20		附属養護学校 11日	9月25日(月)~10月7日(土)
	4年次 必修(主免)	4		20		附属養護学校 12.5日 / 附属養護学校 11.5日	9月5日(火)~10月6日(金)
	4年次 選択(副免)	2	小学校 中学校	4		附属養護学校 11日	9月25日(月)~10月7日(土)
幼稚園教育実習	3年次 必修(主免)	2	幼稚園	14		附属幼稚園(小免取得者)(8人) 11.5日 / 附属幼稚園(幼免のみ取得者)(6人) 12日	9月5日(火)~9月20日(木) 9月22日(金)~10月7日(土)
				19		協力幼稚園(小免取得者) 11.5日	9月5日(火)~9月20日(木)
	4年次 必修(主免)	2		13		附属幼稚園(小免取得者)(9人) 11.5日 / 附属幼稚園(幼免のみ取得者)(4人) 12日	9月5日(火)~9月20日(木) 9月22日(金)~10月7日(土)
				15		協力幼稚園 11.5日	9月5日(火)~9月20日(木)

教育実習における「不易と流行」

～転換期にきている教育実習の最前線からの報告～

附属小学校教諭　田　畑　　章

1　「教師になりたい」

教育実習の開始の平成７年９月４日。附属小学校の玄関は，若い熱気と緊張感であふれかえっている。引き続き，体育館での教育実習の開始式・対面式から始まって小さな子供たちとの出会いなど，学生にとっては長い一日となる。そして，いよいよ二日目より実地授業・授業観察・授業研究会・教材づくりなどに悪戦苦闘しながらも変化に富んだ二週間の教育実習。それが公開授業のヤマ場を通って，安心感と充実感の最終日を迎えるのである。

本校で実習を経験した，ある学生の感想の一部である。

> この２週間があっという間で，子供たちや先生と別れるのがとてもつらかった。中でも日々成長している子供たちと同じ時間を共有できる素晴らしさを実感として味わうことができた。この教育実習を経験して，教師には，子供と共に学び，子供に教えられながら自分自身も成長していける喜びがあること等たくさんの魅力があることが実感としてわかった。
>
> このことから，「子供と同じ視線で話し合い，考え合い，信頼感を築きながら，前向きに努力する教師になりたい」という思いが，ますます強くなった。

「『教職の魅力』に取りつかれた学生と今年も出会えた」ということが，教育実習を最前線で担う私たち教官の手応えでもある。

2　「教育実習は，研究・実践の場である」～不易その１～

さて，転換期にある教育実習の現場から，具体的に報告したい。

富山大学の小学校実習の特色の一つには，従来より公立校である堀川小学校と附属小学校の両方を体験できるところにあった。教師を目指す学生にとっては，両校のそれぞれの特色ある教育方針での教育内容に接することができて，有意義な点でもあろう。

ところが，今年度より３年次生で前期実習も後期実習も実施するなど変更になり，前後期の間に時間的なゆとりがなくなったためにかなり戸惑う学生たちが多く見られたようである。もちろん私たちも子供たちも同様である。このことに対しては，実施するにあたって賛否両論があり，今後に残された課題も多いようである。

このように制度が変わって混乱しながらも，「自分の課題意識を明確にして積極的に生かしていこう」という受け止め方をして，頑張った学生もいたのである。

> 前期の実習で，自分なりに感じたことは「教師が落ち着いていないと子供までが落ち着きをなくす」ということであった。そこで，後期での課題は「落ち着いた雰囲気でゆっくりと事を進めよう」と考えた。自分があわてればあわてるだけ，子供の様子もあわててしまい，それこそ収拾がつかなくなってしまうという前期の反省から後期の課題をもって進めようと考えた。
>
> おかげで，前期ほどの混乱はなくなったのだが，新たな問題点が出てきた。それは，静かなだけで何もできず，結局，子供たちに流されてしまったようである。その結果，「子供たちに流され，押さえるのではなく，コントロールすることができなくてはならない」という自分自身の課題が見つかった。すなわち，パワーはもちろんあらゆることに対処できる柔軟性や見通しをもった計画性がないと，子供たちの学習にはならないのだということを思い知らされたのである。授

業って，ずいぶんと奥が深いことがわかったのである。

両校の教育実習を素直に受け止め，前期実習での反省点を後期実習に生かそうと努力しているようである。これこそ，教育実習で求める姿ではないのだろうか。やはり，「教育実習は研究・実践の場である」という原点に戻って，だれにとっても有効なものになるようにしたいものである。

3　「教育実習は，人間形成・修業の場である」～不易その２～

教育実習の目的は，学校現場において教育活動を体験し，教育についての理解を深めると共に，その実践力を身につけ，教育者としてふさわしい人間を形成することである。そこで，この教育実習を通して，自分を見つめて欲しいものである。たかが，１カ月間ではあるが，毎日，若い学生たちと接していて，日々成長していくことは確かである。それは，人々との出会い（子供・教師・仲間）が成長させるのであろうか。

まず無事に終わってよかったと思う。今まで生きてきて，一番つらく，一番悩み，そして一番有意義な時間であった。21年間生きてきたが，こんなに短い間に自分のいろんな面が見られたことはなかったのではないだろうか。泣き，笑い，怒り，悩みながらの教育実習も，終わってみると，「面白かったなあ」と思えるのだが，その期間中は失敗だらけで落ち込んでばかりいて，そこからはい上がろうと本当に精一杯自分なりに努力したつもりであり，自分の力のなさや努力不足を思い切り知らされたのである。そういう面で，この３年次の教育実習は，自分を見つめ自分を振り返ることができて，真面目に，「自分がこれからどう生きていけばよいのか」まで，とことん考えることができて，とても有意義なものであった。

教育実習で得たことの大きな収穫の一つに，教育実習の仲間や子供たち，先生方との出会いである。これら多くの人たちの中で，確実に成長していることが実感としてわかった。

物事を深く見つめることは，結局，自分自身を見つめることになっている。大げさかもしれないが，人生観が変わっていくのである。学生にとっても確かな手応えがあるようだ。

4　「素晴らしい出会いを・・・」～流行～

全国的な傾向として，子供の数は年々，減少している。そして，学校減や学級減に伴い，教員の新規採用減であるがために，教職を目指そうとしながらも将来像が不明確な疑心暗鬼型や不安症候群の学生が多くいたことであった。「何が何でも教師を目指す」という学生が減っていく傾向の中で，教育実習の在り方（内容・方法・その他）は，見通しをもってさらに工夫の余地があるのではないだろうか。

「堀川校では精神との勝負，附属校は体力との勝負」という話が，両校で教育実習を経験した学生から伝わってきた。「なるほどなあ」と感心してしまった。私たちの立場からしてみると，今年度の教育実習を実施しての成果の一つは，両校で密なる連携プレイーができたことである。

「観察参加の在り方」「事前指導の在り方」「評価の在り方」そして「人間・教師を育てるという原点に戻っての教育実習の在り方」について，話合いがなされたことである。学生や子供たちのためになる教育実習に向かって，共通理解しながらさらに改善していきたいものである。

新構想の教育実習を行って

堀川小学校教諭　滝　澤　久　美

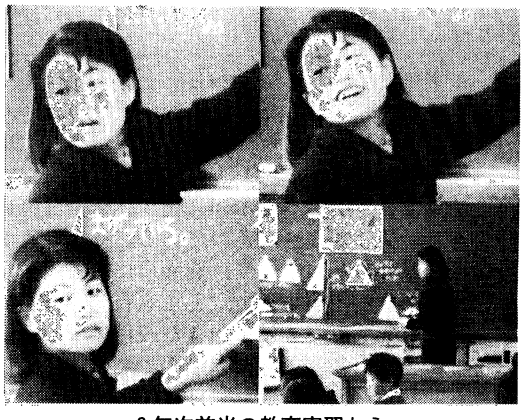
それぞれの旅立ちの時節を迎え，本校で教育実習を体験した学生さんの何人が教職への道に進むことができたか，あるいは教職を目指すために次年度へ向けて歩み出そうとしているか，気になるところである。教職はもとより，就職難が叫ばれている昨今，教育学部に入学してくる学生すべてが，必ずしも教職志望とは限らないという状況の中で，教育実習を通して，少しでも教職に惹かれる学生が増えることを願ってやまない。

ところで，本校で，今年度，新しい構想のもとで教育実習生を受け入れるにあたり，校内でそれに

ついて検討する機会を多くもった。特に，実習時間を前半と後半に分け，前半と後半で実習校を入れ替えるという点や，移行期であることから，前半では4年次生と3年次生の実習が重なり，これまで以上の多くの学生が実習するということ，さらに2年次生の観察参加の受け入れ態勢についても新たに考慮しなければならなくなったからである。また，主免が3年次生で実施されることにより，前半と後半の評価の在り方について新たな問題が生まれてきたことも，ここでの懸案の一つとしてあげられる。

いずれにしろ，先に述べたように，この教育実習を通して，教職への強い動機づけになることを願っていることに変わりはない。その意味で，5月の段階から学部の先生方や附属小学校と情報交換や連絡調整の機会を数回にわたって取らせていただいたことは，今から振り返っても，これらの課題を乗り越えるための大きな力になったと，たいへん有り難く思っている。

さて，今年度の教育実習を振り返るにあたって，教育実習の主体である実習生，特に，短期間で次の実習に移った後半の実習生に目を向けてみたい。前半での実習の疲れと初めての教育実習で受けた強い印象を引きづっての後半の実習生をみていくことは，これからの教育実習の在り方を考える大きな手掛かりとなると考えるからである。



3年次前半の教育実習から

後半の実習生を迎えた印象は，実際のところ，前半の希望と充実感に溢れた実習生を見送った後だけに，大きなギャップを感じたものだった。もちろん，実習生にとってもそうであったろうと思う。しかしその中で，日に日に生き生きとした実習生の姿がみられるようになってきたのも事実である。このおよそ1か月間での教育実習の体験から，彼等が何を学び，何を感じていったのかを，実習後の感想をもとに考えていきたい。

● 全力で立ち向かう子供の姿から学ぶ

始めに，6年生に配属になったある実習生の感想を紹介したい。

> 今回の実習は自分と向き合う良い機会でした。子供達の，全力で，自分の力で解決しようとする姿は，少なくとも私にはないものでした。私は自分に自信がなくていいかげんで，そのいいかげんなことがいいことのような美学もあって，いつも逃げようとしていました。教育実習も正直嫌でした。教育学部に入ったことを後悔するようにさえなっていました。教育実習に向けて何かするというわけでもなく，ただ逃げることばかり考えていました。それで教育実習に入ってからも，私は子供達との間に壁をつくり，少し距離を置いて冷たく対応していました。ところが，堀川の子供達はへこたれないんですね。私の気持ちを見透しているように壁を乗り越えて私のところへやってくるのです。そんな子供達の姿を見ているうちに，いつの間にか自然に笑っている自分に気付きました。私は，教育実習にきてたくさんのことを子供達から教えてもらいました。ありがとう。そんな子供達に私が教えてあげられるのは何だろうか。前半の実習が終わった後，子供にいかにわかりやすく教えるかが私の課題でした。担当の先生からも難しいことを簡単に教えるのが教師だと言われ，私もそうだなと思いました。ところが，後半の実習での公開授業で，それだけではないと気付きました。私のクラスには，Y君やK君のように事実に基づいて考え進める子供達がいます。公開授業では，魚の解剖を扱ったのですが，私は，そういう子供達の考え方を全体に広めることばかりを頭に置いていたために，解剖後の子供達のもっとも素朴な感情を見過ごしてしまったのです。この授業で，子供達に事実を簡単にして伝えることは大事ですが，それ以上に，知ることの喜びを伝えることが大事なんだと実感しました。

今，教育学部で学んでいること自体に疑問をもっていた自分に向き合い，教育実習そのものに対しても，真摯になり得なかった自分を，素直にならせたものは何だったんだろう。それは，子供以外の何者でもないだろう。教育実習後の感想を綴っていくうちに，この実習生は，おそらく満足いくものではなかったであろう公開授業から，授業中における子供の心の動きを大切にするという教育の核心をしっかりとらえている。気持ちが自然に明るくなって学ぶ子供に向かっていることは，この実習生

の場合，確かに実習の成果は上がらなかったにしても，これまでの自分の生き方を見直すよい機会となったに違いない。現在，教育学部で学ぶ中での自分なりの目標も，これによってきっとはっきりとしたものになっていってくれたと確信している。

● 子供理解からスタートする

次に，前半の実習の反省に立って後半の実習に取り組んできた実習生の感想を紹介したい。

> ここ堀川小学校で，僕の実習は終りを迎えたのですが，僕は，今，このような終りを迎え，よかったと思っています。正直言って，前半の実習では，僕はあまり子供と楽しく接することができませんでした。どこか構えてしまい，子供との関係がしっくりといっていませんでした。しかし，ここにきて，まず，教育方針の「子供を大切にする」といった一人学習をする授業で，僕はまず子供を見ることから始めて，そこから子供を理解しようとしたことが，僕の構えをとってくれたと思います。子供を見，その子供のもつ素質や考えに感動し，おもしろいと思ったことが子供をより身近にしてくれたのだと思います。授業をするにつれ，笑顔が出てきたと言われたことは最高に嬉しかったことでした。子供に対する願いをもち，子供の実態を把握して挑む堀川小の授業は，大変に難しいことですが，それと同じくらいおもしろい授業だと感じました。公開授業はうまくいかなかったけれども，僕は，授業の難しさを楽しめたと思います。

確かに，初めての教育実習で，子供とどのように接していいのかわからないままに前半の実習を終えた実習生は，この実習生に限らず他にもいるのではないかと推察される。前半での自分を振り返り，まず子供理解からというスターとラインに立ったことが，この実習生の場合，実習の中での後半の壁をクリアさせることになったわけである。自分なりの確かな教育への手応えを感じ，満足のいくかたちで実習を終えることができたことはなによりである。

それぞれの学校のよさや子供のよさ，実習生の教育への意欲，感性のすばらしさを感じさせる実習生の感想が多く寄せられ，かえって私たちの方が感想から学ぶことの多い教育実習であった。

【研究会・公開講座】等紹介

教育情報科学　山　西　潤　一

今年度，教育実践研究指導センターが関わってきた研究会・公開講座に関して紹介する。

5．国際電子ネットワーキング教育学会富山大会

平成7年7月27日，教育学部にて国際電子ネットワーキング教育学会，富山県教育工学研究会の共催で「ネットワークと教育」に関して討議する研究会が開催された。

富山大学教育学部教育実践研究指導センター長　山極　隆氏の「ネットワークを生かしたこれからの学校」と題した基調講演を皮切りに，武庫川女子大学文学部教育学科助教授　中植雅彦氏の「異文化理解のための学校間交流」，富山県立大門高等学校教諭　藤井修二氏，帝塚山学院泉ケ丘中高等学校教諭　辻　陽一氏による「ネットワークを用いた教育実践」，富山大学工学部助手　高井正三氏の「地域情報ネットワークの状況」等の講演発表が行われた後，イギリスバーミンガムで開催されている「教育とコンピュータに関する国際会議」の会場とビデオカンファレンスを実施した。イギリス時間午前10時，日本時間午後7時の時差9時間であったが，鮮明な画像と音声が伝送され，新しい教育の可能性に関しての議論が行われた。当日は専用のビデオカンファレンスシステムを導入してのデモンストレーションであったが，インターネットの普及でこのようなビ

バーミンガム会場とのビデオカンファレンス

デオカンファレンスや遠隔教育も身近なものになってきた。県内外から参加した95名の研究者や教師で，終日多いに議論が盛り上がり成功裏のうちに会を終えた。

6．富山大学リカレント学習コース「インターネットによる情報宇宙10日間の旅」

平成7年11月6日から17日までの10日間，教育学部教育実践研究指導センターと教育情報科学教室が中心になり，「インターネットによる情報宇宙10日間の旅」と題したリカレント学習コースを実施した。本学習コースは，富山県リカレント教育推進事業として社会人の為に実施されているものである。社会の情報基盤整備が進み，インターネットへの関心が高まってきていることもあって，募集定員20名のところ，あっと言う間に募集定員を越えてしまった。応募された方々全員に受講して頂ければ良かったが，実習機材の関係で定員の1.5倍の30名で打ち切らざるを得なかった。

さて，内容は以下の通りである。

1）インターネットが文化を変える……教育学部　山西教授
2）インターネットによる電子メール……教育学部　向後助教授
3）インターネットによるビデオ会議……教育学部　穴山教授，大森助教授
4）インターネットを経済に生かす……経済学部　桂木教授
5）インターネットは世界最大の図書館…図 書 館　吉田学術情報係長，人文学部　筒井助教授
6）インターネットが教育を変える……教育学部　山極教授
7）インターネットによる情報発信……教育学部　山西教授，工学部　瀧田助手
8）インターネットを使うには……工 学 部　高井助手
9）インターネット上のエチケット……教育学部　山極教授，工学部　高井助手

「既成の概念を打ち砕き新たな文化を創造するインターネットの魅力」についての概論から始まり，「電子メール」「ビデオ会議」「経済情報の収集と活かし方」「国内外の電子図書館の利用」「インターネットが変える教育の問題」「情報発信の仕方」「ネットワークエチケット」等，インターネットに関わるあらゆる内容を，まさに情報宇宙を旅するがごとく体験的に学習できた。インターネットを導入している企業からの受講生も多く，連日夜遅くまで実習課題に取り組むなど大変熱心であった。教官サイドも日頃の学生相手の講義と異なり，第一線の社会人相手とあって，熱の入った講義や質疑が連日展開された。この講義の内容，実習課題などは，即日インターネットに紹介され，学外からも見ることが可能にしたので，受講生の中には，自分の会社から講義内容や実習課題を視聴でき，まさに「開かれた教室」というインターネットの可能性に関して直接体験でき，リカレントの目的が十二分に達成できたものと思われる。

インターネット上に紹介されたリカレント学習コースのホームページ

最後に受講生の感想を記して，お世話いただいた先生方への感謝としたい。

- 仕事の傍ら，このような最先端の勉強はなかなかできません。大変楽しく勉強させていただきました。
- 雑誌などで知識としては知っていましたが，わずか10日間でいろいろ体験することができありがとうございました。今後はインターネットを通じて知識を高めたいと思います。
- 熱心な御指導ありがとうございました。実習は本当に貴重な体験でした。インターネットの推進者として会社で努めたいと思います。
- 全ての講習に大変興味を持つことができました。初心者でしたが，これをきっかけに，より専門的に技術を習得し公私の生活に反映させていきたいと思います。

・諸先生方の熱意ある講座ありがとうございました。リカレント学習が生き方に大変プラスになっています。

7．日本教育工学会「冬の合宿」研究会

平成7年度（1995年度）日本教育工学会冬の合宿研究会が，富山県教育委員会，富山県高等教育振興財団の後援を得て，富山県教育工学研究会との共催で，平成8年2月3日（土）・4日（日）の両日，富山県大山町のインテック大山研修センターを会場に，「マルチメディア・ネットワークは教育を変えるか」というテーマのもと，北は北海道から西は徳島までの130名が参加して開催された。

1日目の第1セッションでは，3件の問題提起が行われた。最初に，富山大学の山西潤一教授が，マルチメディア・ネットワーク環境は，状況的学習を実現できる可能性があること。学習者の目的意識の明確化，学校・教科・教師の壁が取り払われた開かれた学習環境のなかでの情報発信能力と問題探求能力育成の可能性について提案された。続いて，金沢大学の黒上晴夫助教授は，学校現場においてマルチメディア・ネットワークシステムを構築するための基本的考え方を提案された。引き続き，金沢大学教育学部附属小学校の小林弘二教諭が，同小学校に導入したマルチメディア・ネットワークシステムの概要とその活用事例を紹介された。さらに，黒上助教授は，学校現場が抱えている問題点として，ネットワークに接続することに一生懸命で，それを何に使うことができるかが未だ不明であることを強調された。そして，10年後を志向して，そのシステムをどのように教育学習で活用していくか，学習観を変えることにつながるのかという2つのアプローチをとりながら実践的研究を進める必要があると提案された。最後に，東京工業大学の赤堀侃司教授が「インターネット100校プロジェクトの動向」と題して，学校におけるネットワーク活用の先がけのひとつとなっている100校プロジェクトの現状を取り上げ，ホームページの記述内容の類型分けによる考察からはじまり，活動事例の企画内容，ネットワークカンファレンスの実情，活用トピックスの紹介，及び指定校の所属教員の受けとめ方についての情報提供がなされ，これらのネットワーク活用の在り方について提案された。休憩のあと，富山大学の山極隆教授が「これからの学校教育－クロスカリキュラムにみる個性化・情報化・国際化－」と題して講演された。その中で，21世紀を展望した我が国の学校教育の充実・発展の方向性として，探求創出型学力観に立ち，各教科の指導において，内容知（何を学ぶか），方法知（どのように学ぶか），自分知（学んだことが自分自身の自己実現にどのように寄与するのか）の達成を目指すとともに，合科的・総合的横断的指導と地域との連携を密にした指導を図る必要があること等を提案された。夕食・休憩のあと，話題提供として，富山大学の向後千春助教授が「新しい学習環境におけるメディア活用を行う場合は，これまでの評価方法を変える必要があるとし，何のための評価か，何を評価するのか，どのような方法で評価するのか等について検討する必要がある。これまでのテスト方法を見直し，学習者の内面を読んでみたりすることなども取り入れながら，学習の結果だけを評価するのではなく，学習の過程でどのようなことを考え，どのようなことをしたかを評価することについても検討する必要がある。また，メディアを活用して問題を解決する学習の場合は，メディア込みの能力の評価をどのように考えるかも検討する必要がある。」と提案された。引き続き，2つのワークショップとグループディスカッションが行われた。「初心者のためのホームページ入門講座」では，上越教育大学の小川亮介助教授がHyperCardで開発したHTML作成ツールを用い，ホームページの作成方法について紹介された。その後，参加者がグループに分かれて自己紹介のホームページを制作した。QuickTakeで取り込んだ顔写真も添えて，作品がインターネットで公開された。「ネットワーク・オペレーション・センター（NOC）の設置と運用」では，長岡技術科学大学の黒田卓助手が，

熱心な議論が繰り広げられる研究会

パソコンでネットワークを構築する際のポイントとネットワーク管理者のノウハウについて，実演を交えながら説明された。同時並行して，「教科指導でマルチメディア・インターネットを活かした授業をどう設計実施するか」，「学力をどのように捉え，その評価をどうするか」，「教科の壁，学校の壁をどう乗り越え，学校・地域で人のネットワークをどう作るか」の３つの分科会に分かれて自由参加でグループディスカッションが行われた。熱の入ったディスカッションが真夜中まで続けられ，合宿研究会の意義が大変深いものであった。

２日目の第２セッションでは新潟大学の生田孝至教授の「コミュニケーションの変化と求められるリテラシー」と，上越教育大学の南部昌敏助教授の「教師支援のためのマルチメディア・ネットワーク利用」の２つの話題提供が行われた。その後，岐阜大学の加藤直樹助教授から，インターネットを用いて，岐阜大学で公開されているホームページにアクセスし，学習者支援を意図した学習情報提供としての案内情報と事実情報のデモンストレーション，並びに，教師を支援するための文献情報，教材情報の案内情報，静止画像とその解説，図鑑等の教材等の事実情報のデモンストレーションが行われた。最後に，静岡大学の永野和男教授が「学校教育におけるマルチメディア・ネットワークの可能性」と題して講演された。その中で，ネットワークに期待できる機能として，情報と体験の共有，コミュニケーション，協同・強調学習，発信の機会の提供を指摘し，学習はコンピュータを離れたところで成立するという仮説に基づき，小中高校における情報教育カリキュラム構成の枠組みが示された。そして，ネットワーク環境を整備するために必要な研究開発とその環境における学習の実態を解明するために，遠隔共同学習プロジェクトの研究経過と作品作りのための支援ツールの開発と提供について紹介された。

今回は，大雪警報が連日出され，電車等の交通機関に乱れがでるなど，参加者は会場まで到着できるのかやきもきする中での開催であったが，130名の参加者を得て，熱意あふれる中，ホットで最新の話題提供と講演に基づき，熱心な質疑応答が交わされていた。中でも，富山県内の各地から小中高校の先生が80名以上参加され，熱心に議論に加わっていたことが特筆できる。最近，学校現場に急速な勢いで導入されている「マルチメディア・ネットワークの可能性とその課題」について様々な角度から議論を深めることができ，大変意義のある研究会であった。今後も，大学の研究者と学校現場の教師が一緒に議論を交わすことができる場として，今回のような研究会や教育実践研究指導センターでの研究会が継続的に活発に行われることを期待したい。

印　刷　　平成８年３月18日

発　行　　平成８年３月25日

編集発行　富山大学教育学部

附属教育実践研究指導センター

代表者　山　極　　隆

〒930　富山市五福3190

(TEL)0764－45－6380

（電話がダイヤルインになりました）